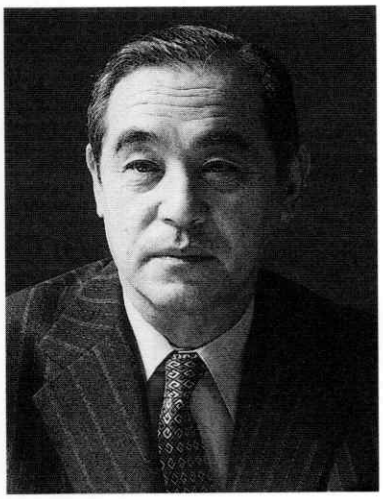
『創部50周年記念誌』序

慶応義塾長　石川 忠雄



スポーツに於いて慶応義塾の果たした役割は大きい。それは応援歌「若き血」の結びの一節「陸の王者、ケイオー」という歌詞の、与えた影響力かも知れない。もちろん数多いスポーツのなかには、慶応義塾体育会が、その種目のわが国での育成、普及に、文字通り大きい力を籍したものも、決して少なくない。ラグビーの如きもその一つで、明治32年、英国人クラークと友人田中銀之助の２人によって、わが日本に紹介されたのが、その嚆矢となった。

これと同じような立場で、そのスポーツの慶応義塾での歩みが、わが国大学体育会史の魁けをなしたものとして、ホッケー部があり、同じく山岳部があったことも忘れてはなるまい。これらの部史は、夫々その後の長い足跡を辿るもので、その間、照る日曇る日の消長がつきまとうのも、また当然である。ただその際つけ加えておきたいのは、慶応義塾の学生たちの手がけたスポーツが、その後わが国で幅広いプレーヤーなり愛好者なりをもつスポーツにまで発展しているのは、創設者として嬉しいことである。

バドミントン部はそうしたスポーツのなかで、平成４年に創部50年を迎えるという。この部もはじめに触れたように、わが国への紹介、輸入に際し、慶応義塾がその先鞭をつけた種目のひとつであった。尤も義塾体育会への正式加盟が認められたのは、昭和25年10月のことであった。従ってバドミントン部には、その前史ともいうべき８年の歳月があったのである。

『慶応義塾百年史』はその草創期のバドミントン部に就いてこう記している。

「昭和17年10月、バドミントンの学生団体としては日本最初のクラブとして発足した。」22年、塾内対抗競技新種目団体に加盟し、25年10月体育会に加入した。この頃は広田、藤井組が全日本選手権大会でダブルスのタイトルを連取した。

体育会への加盟が認められて以後、スポーツとしてのバドミントンは、学生の間でも広く認知されるものとなり、ダブルス、シングルスともに、慶応の黄金時代が続いた。それらに就いては、今般『50周年

記念誌』の本文で詳しく伝えられることになろうが、私自身が抱くいまひとつの興味は、バドミントンという、これまで余り日本では知られていなかった種目のスポーツが、慶応義塾社中の人々の努力によって、いかに普及していったかの経緯が明らかにされることである。いわばバドミントン事始めともいうべき前史を、関係OB各位の努力によって、描いていただきたいものと考えている。それは同時に、ある意味でバドミントンの創部を、敢えて昭和17年としたことの所以を、明らかにするものでもあろう。

バドミントン部創立50周年に寄せて

慶応義塾体育会理事　阪埜 光男

慶応義塾体育会バドミントン部は、本年（平成4年）創部から数えて50年を迎えた。

塾建学者の福沢先生は、人も知る時代の先覚者である。したがって、将来を見すえて、なにごとにもさきがけて行うのが、塾の伝統となっており、スポーツの世界においても、このことが実行されてきている。バドミントン部も、その例外ではなく、体育会に加入して以来、常に学生スポーツの指導的役割を果たしてきており、ここに創部50周年を迎えられたことに心から祝意を表す次第である。

本年は、体育会にとっても、創立百年という記念すべき年に当る。体育会が結成されてから、一世紀が過ぎたわけであるが、バドミントン部は、その約半分を体育会と共に歩んできたことになる。部員諸君は、いつの時代にも、激しい練習に耐え、努力を続けてきているが、入試の難しさのためか、率直にいって、対戦成績は今一歩の感がある。しかし、学問とスポーツとの両立は、これまで、塾が社会の風潮にもかかわらず、学生スポーツのあるべき姿としてかたくなに守ってきた誇るべき伝統であり、バドミントン部もこの伝統を受け継いで今日に至っているといってよい。

今後も、21世紀に向って、この伝統を維持しつつ、前進されることを心から願うものである。

創立50周年を祝い、式典も挙行することの意義は、過去の歴史と伝統を回顧し、先輩が築き上げてきた実績を評価することにとどまらず、現役諸君が50年という節目を明日へのスタート・ラインとして決意を

新たにすることにある。

これまで、物心両面にわたって現役部員諸君をバックアップされてこられた先輩諸君に感謝申し上げるとともに、バドミントン部三田会の発展と部員諸君のさらなる健闘を祈念して祝辞に代えたい。

バドミントン部創部50周年を迎えて

慶応義塾体育会バドミントン部長　高宮 利行

バドミントン部が本年をもって創部50周年を迎えましたことは、まことに慶賀にたえません。関係各位から丁重なお祝いの言葉を頂戴致しまして、この歴史的な一瞬を喜ぶと同時に、今後に果たすべき責任を考えまして、身の引き締まる思いでございます。従来の発展に寄与されました各位、現役、OB、そしてそのご家族の方々に厚く御礼申し上げます。また前部長の平先生にはほぼ4半世紀にもわたってご指導いただきましたことも特記せねばなりません。

中学・高校時代に私自身がバドミントンのまね事をしていたために、高校の先輩のプレーを学ぶため、リーグ戦や早慶定期戦を観戦しにでかけたのは、昭和30年代のことでした。また英語をかじっているという理由だけで、我が国で初めて開催されたユーバー杯、トマス杯の裏方をつとめたこともよく覚えております。その当時、日本協会の理事長は今は亡きOBの森友氏でしたし、全日本の選手として宮永氏が活躍していました。三田クラブの現会長小宮氏とお知合いになったのも、氏が全日本の監督を努めておられたという事情からでした。

こうやって、青春の1ページをバドミントンとともに過ごしたという点では、私も三田クラブの皆さんとある程度共有しているものがあるといってよいでしょう。今思い出しても懐かしさで一杯です。

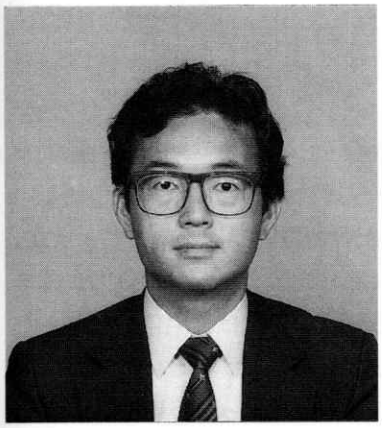
アマチュア・スポーツのありかたについては議論が続いておりますが、学生時代にはよき選手として、卒業後はよい社会人としてスポーツにいそしむ姿が理想的でしょう。当部の出身者には、ぜひこういった姿勢を貫いてほしいと存じます。

我が国におけるバドミントンのルーツ校としての伝統と誇りをもって、当部がますます発展すること、さらに半世紀後には創部100年を祝う日が来ることを祈念致しまして、私のごあいさつとさせていただ

きます。今後ともよろしくご支援のほどお願い申し上げます。

創部50周年に寄せて

前慶応義塾高等学校バドミントン部長　江口 芳夫



前任者の森谷雅美氏から塾高のバドミントン部の顧問を引き継いで、早いもので5年という時間が経過しました。顧問を引き受けた始まりは、私の都立九段高校在学中の苦い経験からでした。当時、団塊の世代の私は受験戦争のあおりで運動不足からくる肥満児でした。高校に入学と同時に何か適当な運動部でも、という安易な気持ちからバドミントン部の練習に参加していました。そして何回目かに「皇居一周マラソン」という厳しい洗礼をうけ、シャトルを一度も打たずに幽霊部員になってしまいました。そして、時が過ぎ教員になり、ある時塾高の教員向けのアンケートのなかに顧問になってもよい「希望するクラブ」という欄がありました。何を血迷ったかそこに、“バドミントン”という文字を書いてしまったのもまたまた早計でした。

5年間というと、50年間のちょうど10分の1にあたります。現実はどうかと言えば、大学の部に送り込めたのは、松井君、巽君、川南君の3名ということになります。特に残念なことは、塾高のキャプテンは、すべて高校で引退卒業という現実があります。何か私がクラブのために出来たことはあったのか、悔やまれることばかりで、このような文章を書くのも気が引けますが、なぜ現状はこうなのか、少し触れてみようと思います。

私がよく歩くマムシ谷のテニス・コートの脇に小泉信三氏の「練習ハ不可能ヲ可能ニス」という碑が建っています。受験の心配のない我が校において、同地区の他の高校に負けないほどの時間と設備、そして合宿毎に訪ねてくれるOBの方々がいるなどという環境は申し分ない条件にあると思います。そして、我が部の練習の多さは他校に負けないというのに、試合といえば、「試合に勝つことを不可能にしている」という皮肉な結果になっていました。試合にどうしてその実力がでないのか、不思議でした。そしてコート・サイドにいて試合を見ていて、いつもにがにがしい思いをするのは、いわゆる逆転負けでした。これが部内で切磋琢磨して選抜されてきた部の代表かと、疑問を持た

ざるを得ない状況がよくありました。練習であれほどよいプレーが出来ている彼が、なぜあんなにもくずれてしまうのか、いくら力量があっても試合に負けてしまうのでは、それはそれだけの「実力」でしかないのでしょう。よくラッキーなプレーが2度続けば、それは偶然の出来事でなく実力である、と言われています。こんな事を書いている私も、自称「チキン・ハート」の持主で、たびたびテニスの試合で勝ちを意識し過ぎて、負けてしまうことがたびたびありました。試合前の練習までは、圧倒的に勝てるという情勢にありながら、いざ終ってみると試合結果は逆になっていました。勝負に勝つということは、やはり勝負強さという先天的要素が、かなりの割合で支配しているように思えます。とかく、バドミントン・プレーヤーには気持ちの優しい子が多いように見えます。特に我が校だけの傾向ではないでしょうが、いったん試合の流れが相手にいくと、それを変えるだけの気力が薄まっていくようでした。しかし、最近は部員の中には、毛色の変わった楽しみな連中が入ってきて、14対3から逆転勝ちするという出来事もありました。こんなことを一つづつつみあげていって、勝負強さという真の実力を持つ、集団になっていってほしいと思います。近頃の部のようすが、その風向きの変わるきっかけになってほしいものです。

結局、この5年間で私に刷り込まれたことは、よく目にする「バトミントン」という文字を、いちいちこだわって「バドミントン」と濁点をかきくわえるという行動様式だけであったような気がします。

1992年．春．

（注）江口部長は、平成4年4月に湘南藤沢キャンパスに開校された慶応義塾湘南藤沢中・高等部へ転任され、後任部長に遠藤耕一氏が就任されました。

女子高部長として

慶応義塾女子高等学校バドミントン部長　喜多村 隆

慶応女子高バドミントン部の顧問は、そのまま自動的に大学体育会バドミントン部副部長の任にあたる。その取り決めはいつからのことなのか寡聞にして知らない。私はただそれに則っているだけで、「副部長」の肩書は何とも面映ゆいものが有る。第一、私は学生時代にバドミントン部に所属していたなどという経歴を持ちあわせているわけではない。それではなぜ女子高の顧問になったのかと問われれば、

喜多村　隆氏

「なりゆき」としか答えられない。しかし、だからと言って同部に対する「情熱」が小さいわけでは決してない。とにかく私は昭和61年４月から件の任に就き、現在に至っている。その間、大学体育会には、平成４年春に卒業した、酒井香世子・鈴木紀子・小澤さち子の３君を代表に、一時期籍を置いた者も含めれば、10名余の女子高出身者を数えることができる。もちろんそれ以前にもいわゆる女子高OGは多く、一大勢力と言ってもよいのではないだろうか。

そのパイプの強さは、何よりも大学体育会に女子高のコーチをお願いしているということが大きい。私の顧問の時代は、諏訪康仁君に始まり、清水政志君・小野寺康秀君・角田敏洋君と人材が続き、それぞれ魅力的な指導を施してくれた。そして平成４年４月からは五十嵐誠一君が新たにその列に連なっている。それぞれ学業と自身の練習の合間を縫って、女子高生のために貴重な時間を提供してくれた。彼らは三田の女子高体育館に足繁く通うだけでなく、春と夏の２回の合宿にも同行してくれる。それはコーチという役にある方だけに限らない。他にも小柳尚之君の熱意溢れる指導や半ば恒例化した草場哲君の参加を初めとして、多くの現役の諸君も入れ替わり指導にみえてくれる。さらに、年末に行なう女子高の総会に、思いがけずも現監督の清水政明氏にお出でいただいたこともある。もちろん女子高OG諸君も普段の練習日に姿をあらわしたりするし、試合となれば応援に馳せ参じてくれる。

ここに一つ問題が生ずる。彼らの行為は、古い表現で言えば「手弁当」なのである。その行為に対して、学校側から経済的に何も応えることができない。それは心苦しさを通り越して、赤面するような状況だ。それでも諸氏はひたすら<バドミントン>のために足を運んでくれるのである。頭が下がる思いがする。そこには「感謝」という以外の言葉は浮かばない。まさに女子高バドミントン部は、大学バドミントン部の支えなしには存続不可能と言っても過言ではないだろう。

願わくは、そして勝手な言い分であるが、現状のような「蜜月」が永遠に続いてほしいと思う次第である。そのためにも、と言っては語弊があるが、改めて慶応義塾体育会バドミントン部の益々の繁栄を祈念して擱筆する。

草創期の思い出（40周年記念部誌より転載）

初代部長　故 寺尾 琢磨

創立40周年と聞かされて、今更ながら「時は過ぎゆく」の感に打たれるばかり。何か書けとのことなので、喜んでお受けしてはみたものの、記憶は薄らぎ資料も散逸して、容易にまとまらない。粗末とのお叱りは覚悟の上、敢えて記憶の糸を辿ってみよう。

部が発足した昭和17年は戦争勃発の直後で、戦捷気分に酔っていたときである。バドミントンという新しいスポーツにとりつかれた数名の塾生が「バドミントン倶楽部」なるものを結成し、野次馬根性旺盛な私を部長に担ぎ出したらしい。この競技は他校にはまだ伝わっていなかったので、横浜のＹＭＣＡあたりと練習や試合をしていたようである。だが戦局は日々悪化、部員も私も勤労動員で農村や工場で汗を流す毎日となって、部活動など完全に吹っ飛んでしまった。

日記をひっくり返してみても昭和18年４月17日「部員５名来訪、報国隊といかなる関係に立つべきかを協議した」とあるだけである。唯だ今でも目に残っているのは、戦争末期の或る日、小泉塾長と奥井さんを西門ワキの幼稚舎校庭に誘い出し、部員の指導で練習の真似事をやったことで、さすが昔テニス選手として鳴らした小泉先生は部員に誉められて喜色満面、その時の無邪気な笑顔は今でも忘れられない。先生が空襲で無惨な姿に変わられたのは、それから間もなくのことだった。

やがて戦争は終ったが、半ば廃墟と化した塾の復興は困難を極めた。部も再建にのり出し、幸いいくつかの大学にいつのまにかバドミントン部が生れていたので、確か昭和22年だったと思うが、法政、明治、立教と相談して、「関東大学バドミントン連盟」なるものを結成し、会長には私が祭り上げられ、塾の部長には奥井さんが就任して下すった。連盟は毎年春秋２回のリーグ戦を行ったが、さすが元祖の塾は抜群の強さで、まるで試合にならなかった。会場探しが苦労の種で、焼け残った体育館を求めて都内を転々したものである。だが私の覚えているのは幼稚舎と佐久間小学校だけで、そのほかは思い浮かばない。女子部員の現われたのがいつだったかも思い出せないが、昭和37年の創立記念の席で私が「女子部員がタッタ１人では情けない」と嘆いた

ところをみると、長いこと女子学生にはあまり魅力的ではなかったようである。

やがて私は身辺頓に多忙となり、部からおいとまを頂き、昭和44年には、定年で住み慣れた三田の山ともお別れした。以来13年、いつしか83才の老爺に化してしまった。子供がないので、さぞ淋しかろうと同情されるが、結構楽しみはあるもので、ことに私の場合は、いろいろのスポーツと関係したので、そのテレビ放映がとても楽しい。考えてみると私ほどいろいろの部に首をつっこんだ人間も少ないようでこの部のほか、スケート、自動車、スキーの各部長を勤めたばかりか、最後には応援指導部長まで兼ねたので、大抵のスポーツに親しんだわけで、その中には自分では全くやらなかったスポーツは必ずしも自分がやるだけが能でないことを痛感している。

40周年を迎えるに当って、私は部の今後の一層の発展を祈ると共に、創立当時の部員の苦労と、常に暖かく援助して下すった奥井さんや体育専門の兵藤君の厚意に対して、改めて感謝の意を表したい。

おもいでのあれこれ（20周年記念部誌より転載）

第2代部長　故 奥井 復太郎

時というものは永いものか、短いものか。我がバドミントン部が創立20年ということでその思い出を乞われたが、この20年、本当に永かったのか短かったのか。

森友さんとはその在学時代、別のことでも知り合いであったが、バドミントン練習のため白金小学校（？）の体育館を借りたいがと、当時学生局（今で言えば学生部）に勤務していた私のところにその斡旋を求められたときにはじまる。私は子供のときから羽根つきが上手で、そのためか西洋版であるバドミントンには好意を持つことになったともいえる。部長として関係するようになったのは、その直後か、葉山町、つまり私の近所に住んでいた当時の仲地君が口を切ったことからである。前記の好意、つまり私の主体的条件も整っているので安易々と承諾してしまった事が今日になって及んでいるもとなのである。あげくのはて、全日本学生連盟の会長にすら推され、それも今日まで永年にわたってその席に留まっている。

故に永いともいえるし短いともいえる。待望の体育会入籍も成就し

たが、その後、近来この大事な部の部勢振わぬことは、いささか淋しい。先輩や部員諸君が皆、一生懸命にやってくれているのだが、これが塾の学校としての性格によるものか、こんな始末に切歯扼腕こそしないが、何と申しても意気大いにあがるとはまいらぬていである。

この20年間を顧みるといろいろの事があった。幼稚舎の体育館を使わせてもらっていた。いろいろ文句をいいながらも、何といっても本当に有難かったと申し上げる以外にない。日吉記念館が出来て、あのようにこの問題が解決するということは当時として到底予想が立てにくかったから。

潮田学長の頃に、大ホール再建の議があり、百年祭式場のことが話題に上ったが、その頃から私は、将来の学内行事の会場は数千人を容れる規模でなければ駄目と考え、更にそういう大建築となり、平素常時に利用できるということを考えるならば体育館的（屋内競技用）に設計する以外にないと思考して、体育館兼大講堂案を提唱した。幸いこの議が容れられて日吉記念館となったのだが、それが為に、独特な設計を以って、現在ある型で誕生したわけである。「記念館」と名づけられて、体育館と呼ばない理由もそこにあったので私としては、ひそかにこれでバドミントン部の問題も片づくとホッとした次第であった。文字通り平素は屋内体育の殿堂であり乍ら、一朝事ある時には内外共に荘厳な記念堂として利用出来ることは何よりもうれしい事である。

人のことについて云えば森友さんの監督時代からはじまる。「我が交友録」に私の名も森友さんがのせてくれた為、諸方面から私とバドミントンとを結びつけてくれる事となった。結びつけるといえば、大会の催される地方では三田会の先輩の方々に有力な応援をしていただいたのもたのしい思い出である。次に吹野さん、その時に前田さんが助監督だったり、そして岡君という順序だったかしら。私が関係していた頃活躍していた選手は藤井君、それに次いでか広田君、その頃から私も大分判って来はじめたということになる。インドネシアのイスマイリ君も現れた神戸での大会は印象的だった。

部の思い出でなく選手権大会のことにもなるが神戸での大会で吉原と江井とが激戦をして、吉原君のケイレンで試合が一時中断したこと、京都では女子軍大いに振って多分3位か2位に上ったのはよかったが、男子軍の声援が少々はげしすぎたらしいこと。その時がんばったらしいだれそれ君の顔も浮ぶ。このときは全体に試合が長びいて、会長自身が閉会式をやれず、所定の夜行で帰京してしまったこと。東西対抗

大阪の陣では出場メンバー変更のことで大いにもめ、それに腐ってか、東軍が大敗、立教の佐藤までがシングルで負けるという始末。

そう書いて来ると私自身もバドミントンには少なからず、変なまわりあわせがある。大阪では（東西対抗）体育館内の酷しい寒さのため発熱し、とうとう列車にのるまでの数時間、大先輩T氏のお宅に寝込むという始末。このT氏それ以来も、親しくおつき合い願っていたが先頃なくなられた。京都では丁度文部省の用で出張していたのと大会とが一緒になったが、大学視察の仕事がきつかったので大会がはじまった頃は旅先の宿で病臥中ということ。札幌では夏ではあったが夜中に冷えるのとビールを飲みすぎたのがたたってお腹をこわす……なぞどうも散々な始末。その度に皆さんに御迷惑をかけたことばかり。

でもこの部を通じて皆さんと親しくしているのは本当にうれしい。若い諸君の結婚式にまねかれて御慶び申し上げた事も少なくないが、他の大学の方々のそれにまで御招きを得るに及んだことなどは塾のバドミントンのお蔭というより他にない。

と、いうことで永い間皆さんと一緒であったことを改めてよろこぶ次第であります。

お祝いと期待をこめて

第3代部長　白石 孝

創部50周年、心よりお慶び申し上げます。今から36年前、バドミントン部は大学のリーグの中で先進的な役割を果していました。部長は故奥井復太郎先生でしたが、塾長になられたので、私がその後をお引受けし、それから、かなり長い間、部長をつとめていたと思います。私も当時は若く34才の頃でした。部もまだ若かったし、私は部員の兄貴のような存在であっただけに、何も指導らしいこともできず、これといった世話もせず、今から考えると汗顔の至りです。他大学の部長は先輩でしたし、塾のバドミントン部として、よく私のような者に奥井先生が依頼されたものだと思っていました。しかし、OBがしっかりしていましたし、部員自身の自主的な統制がよくできていた故か、何の心配もなく過ごすことができたといえます。

しかし、その頃から、次第に他大学の技術が進みだして、塾はキャ

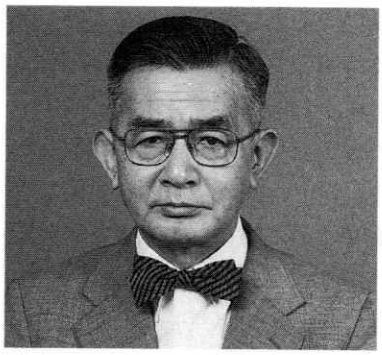
チング・アップの目標となって、試合の上ではあまり芳しい成果をあげられなくなってきました。強い選手もいるのですが、層が相対的には薄くなりがちでした。やはり部の強さは個人の技術に依存するだけに、これはリーグ戦の成績を大きく左右することになりました。毎年、「どこの大学では上手な誰々が入った」とかということを耳にする度に、今期のリーグ戦での部の戦績が気になった始末でした。それでも、部は活力にみちていたと思います。部員もかなり大勢でしたし、女子もよく頑張っていました。私も若かったせいか、よく練習や合宿にもゆきましたし、試合には必ず顔を出し、部員たちとの語らいに時を過ごしたこともあり、私にとっても懐かしい思い出が数々あります。思えばもう30年以上前のことになってしまい、当時の記録や部員名簿など手元にないので、部誌を綴るのには役立たないと思いますが、私の心の中には、いくつかの部の活動が小間切れの映像として残っています。当時の部員の名も失念していますが、名前を聞けば思い出すでしょうし、顔をみれば、「あの時の……」と甦るに違いありません。

バドミントン部も創立して半世紀になると聞き、驚いているというのが本心です。もうそんな歳月を重ねてきたのかと感無量ですが、日本におけるバドミントンのパイオニアとしての部の果した役割から、今日の隆盛の原動力となった部の足跡には、関係者の1人としていつまでも誇りを持っていると申しておきたいと思います。ここに重ねて喜びを述べると共に、部員諸君の手により、これからも部の伝統が継承され、新たな発展が計られることを期待しお祝いの言葉とします。

（慶応義塾大学名誉教授）

50周年記念に当って

第4代部長　平　　良



私がバドミントン部部長になったのは、昭和40年であり、退職するまで20年以上部長であった。同じ人間が部長を長くやりすぎるのは良くないのではないかと思う一方、学生が毎年入れかわる中にあって変わらないものがいても良いのではないかとも考えていた。途中で部長の任期制が出来たが、現在部長である者については以後その基準によるというので結局退職までの長い期間になってしまった。

40年前には、今の諸君には想像できない状況である。リー

グ戦は神田の共立講堂のそばの体育館、早慶戦のレセプションは日吉のバラックの食堂の時代にもどる。リーグ戦の試合数が多くて終了時間は9時ごろになってしまった。

部長は「リーグ戦の間に一度は見に行ってやること、早慶戦に行くこと、合宿に一日くらい行ってやること。」といわれて、それは実行して来たが、海外へ出ることも少くないので時には欠席した。あまり強くなかった女子が思いがけない場所で試合をするので、それにも出来るだけ行くようにしたつもりである。

戦争っ子は、剣道や柔道で時間をつぶしていたのでバドミントンなどと言う外来のスポーツに縁があったわけではない。合宿の折などにさそわれてバドミントンをやってみると、2、3日は体が痛いだけでなく、見ていると狭そうなコートが広くてその中を右往左往して息をきらすだけのことである。特に夏の締め切った暑さの中の合宿は見ているだけでも息苦しくなるものである。合宿を通して思わない町に出かけて行ったり、夜は部員やOB諸君と話し合ったりしたのは楽しい思いでになっている。

20年もやっていると、名簿で確認してみると、OBにもほとんどお目にかかっている。もとより自分が部長であったときの学生は知っているのだから、大変に多くの人との交流の機会であったと思う。バドミントン部は体育会の中では比較的若い部であったことから、OBには私の先輩にあたる方々が少なかった。私より若い人を含めて何人かは50周年記念を迎えられなかったのは悲しいことである。

部長をしている間に、関東学連の会長になったり、亡くなった松下先生に頼まれて全日本の副会長になったりして、慶応に在職中の半分以上がバドミントンに入りびたってしまったようにおもう。おまけに、慶応を離れた現在でも、新しい大学でバドミントン部に入り込んでしまっている。

羽を追いかけまわすだけの、ルールも簡単な競技であるにすぎないとも言えるが、それが、多くの人に好まれてこれからも実力が上げられると共に、広く親しまれるスポーツとなって行くことを祈っている。

創立50周年にあたって

三田バドミントンクラブ会長　小宮 淳宏

慶応義塾バドミントン部の創立50周年を迎えてご同慶であり、またご指導ご後援を賜りました皆様にお喜び戴くことができて有難く存じます。

その50年を顧みますと草創期の10数年は誠に輝かしく、日本のバドミントンの歴史とも言ってよいのに、最近の10数年は力不足から特に評価されることなく過しているのは残念であります。

今はなき森友・諸岡両先輩のご命令もあって、私は日本バドミントン協会の役員として忙しい経験を致しました。日本のバドミントンの発展のために尽力できることは即ち我が部の名誉と心得ても、勢い後輩諸君との交流は疎かとなり淋しい思いを致しました。三田バドミントンクラブの会長を吹野先輩から引き継ぐや、未入会費の督促をやかましく申し上げたり、創立40周年のときは特別募金をお願いしその後も会費の改定、自動振込制度の導入等会員の皆さんにはご負担をかけて参りましたが、やっとわがクラブの財政状態は安定し、それを喜んで意気あがる会員現役の皆さんの手応えを創立50周年の催しを行なうに当りはっきりと感じ取ることが出来ました。

この上は、わが部の競技力の向上を乞い願うのみであります。高宮部長先生を中心にしてがんばりましょう。